

月報 4

「論理の本態について」(4)

1978年2月27日

*

前号の「月報3」は、昨年の12月25日付だったので、今回までに2ヶ月間が空いてしまったけれども、はじめに断っておいたように、月刊には順着しないつもりなので、諒としてほしい。

1月には、「比較生産費説」(39枚)、「乗数理論と加速度原理」(48枚)のふたつのレジュメをまとめた。これは、いずれも、予定外の作業だったので、「記号空間論」の方もその分だけ、また遅れてしまっている。2月13日には、『ソシオロギス』2号のために、「記号空間論」の基本視座」(40枚)を、脱稿した。内容は題名の通りであるが、従来説明の足りなかった部分を書き下ろしてみたもののので、この際紙面に批判いただけるなら、幸いである。

3月には、一方で、失語症をもう一度考えてみるという作業をしたいし、もう一方で、貨幣論にも本格的にとりくみはじめたい、と思っている。

**

さて、今号から何回かにわけて、「論理の本態について」と題する文章を、連載してみたいと思う。「連載」などという、まったく生臭いようなものであるけれども、そうではなくて、単なるなりゆきにあきない。はじめ、1回でのせきってしまうつもりだったが、あれこれ考えている内に、それとしては長くなりすぎてしまったようだし、かといって、単独論文の形にまとめるにすれば、分量も足りず、また内容からしてトタタきぐやないところがあるのだ。(しかし、

橋爪大三郎 (HASHIZUME DAISABURO)

10 pages / ¥25.-

〒248 鎌倉市材木座5-9-11 PHONE 0467-22-1030 振替 橋爪51782

あとと並べなおせば、独立した論文としても読めるよう、レイアウトを工夫してみることにする。

わたしには、子供のころからいろいろ不思議に思われてならないことが、多々ある。宇宙の涯てについてなら、誰しも考えたであろうが、そのほか主なものとしては、重力の本態(ことに、それと同時に作用する点)、電磁波の本態、時間の本態、がある。社会の本態もまた謎であったが、これをわたしは廃棄にしまった。これからのべる、論理の本態はなにか、という問いも、もう随分長いあいだ、わたしの脳裏に巣喰ってはなれない、私かなテーマのひとつである。この問いに対して、わたしは、わたしなりに、解答めいたものを用意してみるつもりだが、突込んだ議論をするには、相当の専門的知識を要するはずなので、どこまで意味あることを論じうるかわからない。しかし、たとえ荒唐無稽と嘲笑われようと、これは、わたしの切実な問いなのだ。

* * *

訂正

さきの原稿「構造=機能理論の射程と限界」(77-12月)のうち、P.2 22-26の記述を、以下のように訂正いたします(下の部令を切り抜いて貼ると、丁度おさまるようになってる)。

(訂正前)

…それに対して、機能主義とは、機能論的論理の組みあわせのみによって、社会事象の一般理論を構成しようとする理論上の立場のことをいう、と考えておく。機能主義の立場で構成される社会理論が、機能理論である。



(訂正後)

…それに対して、機能主義とは、主要には機能論的論理の組みあわせに拠って、社会事象の一般理論を構成しようとする理論上の立場のことをいう、と考えておく。機能主義の立場で構成される社会理論が、機能理論である。

論理の本態について (1)

論理の正体とは、なにか？ この問いが、永くわたしを悩ませてきた。

この疑問は、なにもかもひきずりこみかかぬほどに、深刻なものである。その理由は、比較的容易に納得されよう——並大抵の疑問であれば、疑わしいものを、疑いの外側にもっている。人は、疑いを厳密なものにしようとするれば、疑いを一定の方式にもとづいて組織し、照準しなければならぬ。そのようにして、人は、ひとつの疑いへと身臨める。すなわち、有効な疑いを提示できるためには、疑いの内側に、充分な確信が内蔵されている必要がある。論理は、いわば、疑いを統合する文法のようなものだ。ところが、それに対して、論理がそれ自体を疑う、という場合は、疑いは、その矛先を、自らの内へと向けてしまう。論理に疑問をもつとは、そもそも、ある事柄を疑ったりまた疑わないですませたりすることができるのはなぜか、その根拠を、疑ってかかることを、いみする。

論理の正体は何か、という問いは、危険な問いだ。不用意のままこの疑問につき従っていくならば、疑いそのものをそれ以外のものと混淆させ、両者の差異を溶解させ、思考の全領域を確信と不信の両性具有物でおおい尽くしてしまう、ノンセンスや狂気の領分に、どこまでも近付いてゆくことになる。

取っ付きの悪そうなこのテーマに思考をなじませるために、解りやすい笑い話の類いから、例にあげてみよう。登場いただくのは、ノンセンス詠人の草分けの一人、Charles Lutwidge Dodgson、またの名を、Lewis Carroll という。彼は、つぎのような寓話を書きのこ

2

している——アキレスは、すでに亀に追いつき、その背中に毫髪憚々とのっかっていた。ゼノンの逆理は、事実によって斥けられ、すでに結着をみたかの如くである。アキレスは、この事実をいさぎよく認めるように迫るが、片意地のななは、いっかなそれと認めようとしない。なぜなら、この亀は、その生来の愚かさが高じたあまり、もっとも自明な前提だけから出発するユークリッドの体系の、もっとも単純な推論でさえ、納得することができないでいるのだから。そこで、この亀は、狡猾にも、ユークリッドを崇拝してやまないアキレスに、もう1度新しい追いかけてこまはじめよう、と、しむける。一冊のノートと鉛筆を拵ってまじかまえるアキレスに、亀は言う：

「さて、それでは、その第1命題の論法を、ほんのちよっぴり取りあげましょう——ほんの2前提、そしてそこから引き出される結論です。どうぞノートに御記入ください。それから、書き添うのに都合のいいように、それそれ④、⑤、⑥、としておきましょう。

④——同一のものに等しいものはたがいに等しい。

⑤——この3角形の2辺は、同一のものに等しい。

⑥——この3角形の2辺はたがいに等しい。

ユークリッドの読者なら理解あるでしょうが、⑥は④と⑤とから論理的に導かれ、それゆえに④と⑤とを真と認める者なら誰しも⑥も真と認めなくてはなりませんね？」

「むろんだ！ ハイスクールのどんな幼な子だって——ハイスクールが創案されるやいなや、もっともまだ2千年ばかり先のことだが——そんなことは了解するだろう」

「そこで、もしある読者がまだ④と⑤とを真とみとめずにいるとして、それでも〈結論〉を正しいと認めることもあるでしょうね？」

「むろんそういう読者もいるかもしれん。そういう男ならこうい

うだろう、『わたしは、もし④と⑤が真なら②が真でなければならぬ』という仮言的命題を真と認める。しかしわたしは④と⑤を真と認めない』とな。そういう読者はユークリッドはあきらめて、フットボールに精出したほうが賢明だ』

「それに『わたしは④と⑤を真と認めるが、仮言的命題は認めない』という読者もいるのではありませんか？」

「もちろんいるだろうな。そういう男もフットボールに精出したほうがよいわ」

「で、どちらの読者も」と亀はつぶけた。「②を真と認める論理的必然性にまだいまのところ支配されていませんね？」

「そのとおりだ」アキレスがうなづいた。

「そこでですね、このわたしを第2の類の読者と考えていただき、②を真と認めるよう論理的に強制していただきたいのです」

亀の仕組んだこの競走路の上を、アキレスは、亀をつかまえようと、走り出す。

「おまえに②を認めさせるのだな、ゆしが？」アキレスは思惑ばかりにいった。「おまえの立場は④と⑤を認めるが、仮言的命題は認めない——」

「それを③としましょう」亀がいった。

「しかしおまえは認めないのだろ、

③——④と⑤が真であるならば、②は真でなければならぬ」

「それがわたしの立場です」亀がいった。

「するとゆしはおまえに③を認めてもらわねばならぬ」

「認めるつもりです」と亀がいった。「それをあなたのノートに書き入れてくださったらすぐに。……さて、いうとおり書きとめてください。

④——同一のものに等しいものはたがいに等しい。

⑤——この3角形の2辺は同一のものに等しいものである。

③——④と⑤が真であるならば、②は真でなければならぬ。

②——この3角形の2辺はたがいに等しい。」

「それは③とすべきだろ。②でなく」アキレスがいった。「ほかの3つのつぎにぎっているではないか。おまえが④と⑤と③を認めるなら、②を認めなくてはならぬ」

「それはまた、どういうわけで？」

「論理的にそうなるからだ。④と⑤と③が真であるならば、②は真でなければならぬ。それには異論がなかるう？」

「④と⑤と③が真であるならば、②は真でなければならぬ」亀は考え考え繰り返した。

「これまた仮言的命題じゃありませんかゆ？ わたしがその真たることを理解できなければ、④と⑤と③を認めて、しかもなお②を認めなくてもよろしいでしょう？」

「いいだろう」気さくな英雄は譲歩した。「もっともそうまで執いとなれば呆れ返るほかないが。とはいっても、それはありうることだ。それでゆしはおまえにもうひとつ仮言的命題を認めてくれるよう頼まねばならぬ」

「けっこうです、快く認めましょう、書きとめてくださればすぐに。こうしましょう、

⑥——④と⑤と③が真であるならば、②は真でなければならぬ。ノートに書きこんでくださいましたか？」

「書いたぞ！」アキレスは嬉々として声をあげ、鉛筆を筆入れにおさめた。やっとこの理想の競争路の終点にたどりついたか！おまえが④と⑤と③と⑥を認めるからには、むしろ②を認めるわけだ」

「でししょうか？」亀は屈託なくいった。「そこをば、きりさせませんか。わたしは、④と⑤と③と⑥を認めます。それでもなお②を認めないとしたら？」

「ならば<論理>がおまえの喉元をひつつかんで、いやおうなしに認めさせるだろうよ！」アキレスが勝ち誇ったように答えた。

「＜論理＞がおまえにこういう、『仕方がないんだ。④と⑤と⑥と⑦を認めたからには、⑧は認めねばならんぞ！』だからおまえはどうしようもないわけだ」

「いやしくも＜論理＞が親切に教えてくれることなら、書きとめる価値はありますな」亀がいった。「ですから、どうか書き込んでいただませんか。こうしまくよう、

⑧——④と⑤と⑥と⑦が真であるならば、⑧は真でなければならぬ。

それを認めるまで、むしろわたしは⑧を認める必要はないわけですよ。ですから、それは必要な段階ですよな？」

「なるほど」アキレスはいった。その口調はちょっぴり悲しげだった。

アキレスは、もちろん、亀の待中にまんまとはまってしまった、といってよい。数ヶ月ののち、アキレスが彼のノートを書きこみでびっしり埋めつくしてしまったときにも、このやりとりは、まだつづいていた。Carrollは、最後につぎのような台詞を亀に言わせることで、この寓話をしめくくっている：

「わたしたちのこの対話が、19世紀の論理学者たちに、実に多大な教訓を提議するだろうとお考えになりませんか——」（和瀬尚紀訳、1977:18-23.）

以上はあくまでも寓話であって、Carrollが、たとえどれほどこの亀に自身の心情を仮託しているにせよ、本気で亀そのままに思考しているわけではない。トリックを弄しているのは、Carrollなのだから。しかし、彼のパズルからは、恒に、答えの見出しようがなく、なってしまうような、奈落のような彼の不安を、垣間見ることができる。

寓話という見かけに欺かれないために、この寓話の構造を見極め

ておこう。

まず、全体が、ゼノンの逆理のパロディになっていることは、明らかである。ゼノンの逆理は、“アキレスと亀”にしる。また、“飛ぶ矢は動かず”にしる。いずれも、無限のパラドクスを内容としていた。ギリシャの思索家達は、無限を、完全ではないもの、考えるべきでないものとみなしたから、ゼノンの逆理は、逆理としてみとめられていた。しかし、Cantorが無限集合論を拓いてこのかた、われわれにとって、無限は、もはやパラドクスでも何でもない。それゆえ、ゼノンの逆理が解消してしまった以上は、そのパロディに何ほどのぬうちがあるものか、と思ってしまう人も、いるかもしれない。

ところが、よく考えてみればわかるように、Carrollのこの寓話は、ゼノンの逆理とはあまり関係がない。なるほど、アキレスは、亀があとからあとから無限なく持ちだしてくる命題を、つぎつぎに公準としてノートに記載しなければならなくなっている。しかし、この悪無限は、トリックによって生じたみかけだけのものに、すぎない。亀は、実は、同じ推論規則を、何回も繰返して教えさせているのだ。だから、アキレスは、本当は、推移律をただ1回、彼のノートに書きこんでおきさえすれば、よがったのである：

$$p \supset q, q \supset r \longrightarrow p \supset r$$

先の命題④、⑤、⑥は、実際、互いに上のような関係にある。（本当は、これすら書きこむ必要はなかった、なぜなら、上の式は、きりめて基本的な集合論の定理に対応するものであるから。）それゆえ、亀とアキレスの果てしないやりとりが示すものは、論理的パラドクスではなく、論理と非論理との絶対的な離隔である。

狡猾にも愚かな亀は、人のよいアキレスをだましおこせた。しかし、この寓話の寓話たる所以は、そこから先にある——アキレスにかわって、われわれは、いったいこの手強い亀を、手はおけることができるのだろうか？（以下次号）

あんまりワソ真面目なことばかりでも能がないので、ヒマネタに音楽の話でもしよう。

わたしは、こと音楽（とりわけ、歌唱）に關しては、一家言ある方で、小宮夜に入りたこの頃は、已に音楽があるのではなからうかと本気で心配していた。（というのは、どんな旋律を耳にしても、それが自動的に音名の連鎖に変換されて、バラバウと頭の中にとびだしてきたからなのだが。ほかの人は、この種の記号的秩序に生きてはいなかったのだろうか？ せいとも、これは、物心もつかぬうちから昼となく夜となく聴き（聴かせられ）つづけてきた進駐軍放送の、副作用か？）幸い、わたしの音楽は誰にも見出されるに至らず、ヤマハ音楽教室に通わせられるようなこともなかったが、そのかりり、日本のはやり歌は、どれもこれもかかったるく、わたしは、みかる感性の断絶に、悩まされつづけてきた、と書いていい。それでも、ようやっと最近、きくにたえる曲がいくつか出てくるように

なつたのは、大変好ましくいことである。この10年、たしかに、音だけは進歩した（あるいは、進歩したのは音だけだ、と言うべきか）。わたしは、商業柄、夜中にラジオをかけたたりすることもないので、自然耳にのこるものもいくつかあるわけだが、試みに据えたランキングを掲げてみよう。順位は、まあ好みだけを反映しているにすぎないが、才能、センス、感性、音感、唱力、詩心などを、評定の基準にしたつもりである。たとえば、同じく音程を外すといっても、矢野顕子であれば、身勝手な才能を音の理念が上回ってしまう場合に比べてあり、中島みゆきであれば、歌とことなへみきもどしてしまふ過剰な詩心のゆえである。それに対して、松任谷由実の場合は、詩心もないくせに、たんに正真正銘の音痴であるにすぎない。（かく、彼女には、腹面もないミーハー的通俗性と空っぽの頭とを併せてあまりある、才能と感性と商業気が備わっている——。各人についていちいち説明しはじめるときりがないので、あとは巻附を見て下さい。

前号月報での呼びかけに対し、殆ど未知の才を告ぐ幾人もの文からお返事の華書をいただき、惻に感謝にたえない。どう目が出るかも知れない者の仕事に、継続的な読者としての関心をよせていただけるなど、望外の幸せと認識している。本当のところ、こういうことを始めるには、わたしの力量は不足している。しかし、時期尚早であるうとも、自分の作業が無責任に流れないために、こうしたシステムによる拘束の必要を感じた。こんなはなはた利己的動機にもとづくシステムのせいで、113113の文章を有料で押しつけられるというのは、さぞ御迷惑であるうけれども、それには、わたしの作業によつて施之をいくしか、ないだろう。将来、わたしの仕事がつぎの段階にすすむときには、現行のシステムを、もう少し々まじな制度に改めることができれば、と思っている。とにかく、もう一度感謝させて下さい。そして、お叱りの言葉を待っています。

横綱	矢野 顕子	蒙御免	大関	憂 敢 田
関脇	松任谷由実		関脇	原 眞 二
小結	カレメンマキ		前頭	カ モ リ
小結	中島みゆき		十兩	細野 晴 臣
前頭	山崎 ハコ		〃	中 崎 竜 童
十兩	尾崎 亜 美		〃	矢 沢 永 吉
〃	大橋 純 子		〃	さだまさし
〃	金子 マリ		〃	笑福亭 鶴 光
幕 下	五輪 真 弓		幕 下	河 島 英 五
〃	吉 田 美 奈 子		〃	百 恵 ミ
〃	リ リ カ		三段目	泉 谷 し げ る
〃	イル カ		〃	千 一
序二段	小 坂 明 子		序二段	小 塚 等
序之口	庄 野 真 代		序之口	森 田 公 一
(佐 宮)	浅 川 マ キ		(年 暮)	吉 田 拓 郎